

イギリスの地から  
鹿児島を  
アピールしていく

鹿児島県日置市出身で、現在イギリスで翻訳の仕事をしているが、大英博物館の所蔵品をデジタル化するプロジェクトに携わるトーマス・いづみさん。昨年9月、薩摩藩英国留学生渡英150周年に関わるイベントを企画支援する「薩摩ワンファイフティ150」の代表にも就任した。そんないづみさんに、活動内容やイギリス人が持つ鹿児島の印象、海外を目指す若者へのエールなどを伺った。

ワンファイフティ  
薩摩150代表

トーマス・いづみさん

Thomas Izumi

## 「薩摩150」を結成した 動機や現在の活動について 教えてください

薩摩150ワシントンを結成したきっかけは、鹿兒島に6年在住歴のあるサイモン・ライトさんとの出会いでした。2014年6月頃にイベントの打ち上げでお会いして、2015年が薩摩藩英国留学生渡英150周年にあたることから、留学生を顕彰するイベント、150周年を契機に鹿兒島をPRする何かをしたという話を伺いました。その後、さまざまな方のご協力を得ながら、同年9月に会合を開いた際に代表に就任しました。

活動としては、薩摩藩英国留学生渡英150周年や鹿兒島をPRするような催しの企画支援です。まずは、



ホームステイで受け入れた2人の派遣生(右)と  
トーマス・いづみさん(左奥)

いちき串木野市の羽島小、羽島中の児童、生徒に協力していただき、私たちのロゴ、そして「薩摩藩英国留学生渡英150周年」を象徴するようなロゴを考えていただきました。75点の作品が集まり、2015年2月に薩摩150のメンバーや関連団体の方々と一緒に決定しました。

また、イギリス国内の薩摩藩英国留学生渡英150周年の記念行事として、薩摩琵琶コンサートや講演会などを開催。さらに鹿兒島県のPRキャラクタ「ぐりぶー」、県の無形民族文化財に指定されている日置市吹上町の伊作太鼓踊りや、ご当地キャラ薩摩剣士隼人などをお呼びし、パフォーマンスを行いました。どれもとても反応が良かったです。鹿兒島の物産販売や情報発信もし、焼酎の試飲はすぐになくなってしまいうほど人気でした。

7月には鹿兒島から派遣された現代版薩摩スチューデントの皆さんとの交流のために、クイズ大会を開催しました。個人的にはスチューデントの皆さんを大英博物館にご案内したり、ホームステイで2人を受け入れたりました。

派遣生のリクエストに添えていくつかロンドン市内を回りましたが、街並みや見るものにとっても目をキラキラさせていたのが印象的でした。

私は初日から皆さんにお会いしていましたが、その時に英語が聞き取れ

ないと言っていた派遣生が、最後に会った時には、ちゃんとイギリス人の方と会話をしているのを見た時、頼もしく思いました。UCL(ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン)の学術交流会では英語漬けになって、「日本語を話したい。英語で言いたいことを言えなくて悔しかった」という声も聞かれましたが、イギリス人の生徒や他の日本全国から集まった学生たちの中で、奮闘しているようでした。

## イギリス人から見た 鹿兒島の印象は？

薩摩藩英国留学生のこと、ましてや、生麦事件、薩英戦争もイギリスではあまり知られていません。しかし、「SATSUMA」という言葉はイギリスでは「温州みかん」や「薩摩焼」を指し、言葉自体をイギリスの方々は知っていますので、留学生のことを話す際にイギリス人にとって、とっつきやすいのは幸運です。

薩摩藩英国留学生渡英150周年は、イギリスではとても面白いストーリーだと認識されていると思います。特に、全く海外に出たことがない当時のサムライたちが、新しい体験をしなから66日間の船旅をしたというところに、とても興味を抱くようです。

イギリス人から見た鹿兒島の魅力は、ずばり桜島です。活火山と共に暮ら

す地域というのはとても珍しく、インパクトがあります。また、イギリス人はどちらかというと、食よりも自然を好む傾向にあるので、鹿兒島の島や海山などはとても魅力的だと思います。

## これから海外で 羽ばたこうとしている 青少年にエールを

日本の外に出ると、それまでの常識や見方を試されるような知らない世界が広がっています。見聞を広め、自分の今までの環境を客観的に見ることもできる機会にもなり、鹿兒島の良さも改めて実感することでしょう。その国の言語だけでなく、行きたい国の歴史、文化、その土地の人がどんなことを考えているのかを知られば、その国の人との距離がもっと近くなるかもしれません。イギリスは薩英戦争をはじめ、鹿兒島と歴史的な関わりのある土地。ぜひ、イギリスにも来てほしいですね。



イギリス人に大人気のぐりぶー